西部戦線一九一八年（1930）

WESTFRONT 1918
VIER VON DER INFANTERIE
QUARTER DE L'INFANTERIE ［仏］

メディア 映画
ジャンル 戦争　ドラマ
製作国 ドイツ
色彩 B&W
時間 96分
初公開日 1931/03
公開情報 劇場公開

【解説】

「パンドラの箱」「三文オペラ」「炭坑」のゲー・ヴェー・パプストことゲオルク・ヴィルヘルム・パプストの監督作で、小説『四人の歩兵』の映画化。ヨーロッパでは第２世界大戦を上回る戦死者を数えた、激戦の欧州大戦（第１次世界大戦）末期の１９１８年を舞台に、一兵卒の非運を冷徹に描いた戦争映画の傑作である。

フランスのある村の一家に駐屯していたカール、バヴァリア人、学生、中尉の四人。カールとその家のフランス娘とのはかなく結ばれることのない恋、休暇で妻のもとを訪れたカールが目の当りにする現実（妻は生活の窮乏のため、他の男に身を任せていた）、そして悲惨な最前線の模様を描いている。ある者は人知れず死んでいき、ある者は激しい緊張から発狂し、またある者は瀕死の重傷を負う……。

必ずといっていいほど米映画「西部戦線異状なし」と比較されるが、米映画が大仕掛けで派手な戦闘シーンがあるのに対して、殆どが戦場シーンにも拘わらず派手な戦闘シーンを見せびらかさずに戦争の狂気と空しさを切々と訴えかけている。セット、撮影、演技などを簡素化しているが、“新即物主義”と呼ばれた虚栄を廃する演出であり、荒れ果てた野原、塹壕をはいずる兵士、またラスト近く泥水の溜まった砲弾の穴に潜むシーンの悲惨なリアルさだけでも、その意図は充分。特に音響効果は素晴らしく、戦闘の現実音の不気味さは全く劇音楽などを必要としない。多大な検閲の惨禍を受けても、映画が叫ぶテーマは揺るいではいない。３１年、米ナショナル・ボード・オブ・レビュー外国映画ベスト・ファイブ。

【クレジット】

監督	Ｇ・Ｗ・パブスト	G.W. Pabst
原作	エルンスト・ヨハンゼン	
脚本	ラディスラウス・ヴァホダ	Ladislaus Vajda
撮影	フリッツ・アルノ・ヴァグナー	Fritz Arno Wagner
	シャルル・メタン	
出演	グスタフ・ディーズル	Gustav Diessl
	フリッツ・カンパース	Fritz Kampers
	ジャキー・モニエ	
	ハンス・ヨアヒム・メービス	
	クラウス・クラウゼン	Claus Clausen
	ハンナ・ヘースリッヒ	
	エルゼ・ヘルラー	

このデータベースのデータおよび解説文等の権利はすべて株式会社スティングレイが所有しています 。
データ及び解説文、画像等の無断転用を一切禁じます。 Copyright (C) 2024 Stingray. All Rights Reserved.